

意味と認識

——パース研究(4)——

西 勝 忠 男

目 次

1. はじめに——なぜ意味を問うか——
2. 意味の格率
3. 意味の分析
4. 検証とディスポジション
5. アブダクションの論理と意味
6. むすび——選択的非決定論としての意味理論——

＜知識をえる真の方法が実験であるのだから、認識の真の機能は実験を行なう機能でなければならない。この機能を私は論じているのである。＞

——ウィリアム・ブレイク——

1. はじめに——なぜ意味を問うか——

英国哲学界の長老であるオクスフォードのライル G. Ryle (1900—) によると¹⁾、二十世紀の哲学は「意味」の問題をめぐって展開してきたのである。ラッセル B. Russell (1872—1970) もムア G. E. Moore (1873—1958) も、またシュリック M. Schlick (1882—1936) やカルナップ R. Carnap (1891—1970) らのウィーン学団もウィトゲンシュタイン L. Wittgenstein (1889—1951) も、みなそれぞれに「意味」の哲学に深く関わってきている。ここで論究しようとするパース C. S. Peirce (1839—1914) はまさにこの問題の現代的展開における先駆者的役割を果しており、きわめて大きな影響を与えているのである。

しかし意味の問題は、なにも二十世紀哲学の特質であると強調できるようなものではないと反論できるかもしれない。というのは、哲学そのもののあり方として、世界を問い、認識を問い、論理を問い、モラルを問う——それらはいずれも一つだけの限定的で確定的な答を許すような問いではない——としても、それらはみな、実はそれぞれの意味に関わるものなのだと言えるであろう。つまり、世界の本質としての意味を問い、認識のあり方としての意味を問い、人生の価値としての意味を問う、というように。そして、言うまでもなくそれらは哲学古来の重要な問題なのである。しかしながら、これらの問いを問うことはまた同時に、「意味とは何か」というさらに基本的な問題への省察を含むことになるであろう。世界についての知識を求めるものが科学であるとすれば、その知識の意味を求めたり、意味そのものを求めるものが哲学なのである。

まず問題を常識的レベルで考えることから始めよう。〈それは意味がある〉とか〈そんなことをしても無意味だ〉とか言うように、われわれはよく「意味」という言葉のもとに、そのものの意義とか重要性を含ませた主張をする。つまり、価値的なものへ関連させて「意味」という言葉を用いるのである。

ところで、いったいわれわれがものを「知る」というようなことは、たんに客観的に把握できる知的認識のはたらきに依るというよりも、そのものの重要性としての意味を、一挙に了解することによって成り立つのではなからうか。しかもそれで用が足りるから、それ以上の知識を求める必要はないことになる。しかし、この了解とはどんな構造を持つものなのか。了解ということでは済まずことは、ひどく不明確な一人よがりであって、意味の問題をなにも見極めずに通過してしまふことになるのではなからうか。終局的には、個人個人のそれぞれ勝手な認識能力にもとづく了解であるとしても、「意味」はまず分析されることが必要なのである。

また、われわれには物事の間接的な関係性を対立的な観点から取りあげ、二元論的に——今の場合なら認識対価値というように——捉えようとする傾向が強いためか、それら相互のより緊密な一体的依存関係を見過してしまい、かえってその

ものの本質を捉えそこなっていることが多いのではないかと思われる。

そこでたとえば、現代英国のすぐれた哲学者の一人である エイヤー A. J. Ayer (1910—) によって、「知る」ということがどんなことかを見てみよう。彼はなにかがこうだということ、つまりある事実を知っているための必要にして十分な条件とは、知っていると言われることが真であるばかりでなく、それを確信していること、確信する権利をもつべきことの二つが伴わねばならない、と分析している²⁾。「知る」ということの意味が、ここでは論理経験論的に分析されている。つまり、「知る」ということが論理的な真理値に関わるだけでなく、内的証拠としての確信を持ち、さらにそれを外的に立証——検証——できる権利を持つべきことによって成り立つと言われているのである。エイヤーのこの定義は懐疑論者に提示するためになされているのであるが、それは認識論上の難問が懐疑論的な挑戦によって生じるからなのである。しかしながら、懐疑論者の挑戦による認識論的な問題はさておき、この小論では「意味」にまつわる論理哲学的諸問題を取りあげることにしたい。

〔註〕

1) *The Revolution in Philosophy* (1963), Macmillan. p. 8.

2) A. J. Ayer, *The Problem of Knowledge* (1956), Macmillan. p. 34.

2. 意味の格率

さて、パースがこの問題に対して与えた影響は、一般的に言えば、「意味の検証理論」とよばれるものに対してである。つまり、概念や命題が経験のセンス・データに還元できれば有意味であるが、この還元が不可能な形而上学的命題はすべて無意味だと論証するのである。この理論は1920～30年代におけるウィーン学団の論理実証主義 *logical positivism* ないし科学的世界把握 *Wissenschaftliche Weltanschauung* を支える原理となったものである。しかしパースの意味の哲学はこの理論に限られるほど狭いものではない。彼の論理学や科学哲学におけると同様に、この分野においても、今日的な問題意識による検討に十分耐えうるばかりでなく、問題解明への貴重な示唆を与えてくれるものを持っているのである¹⁾。まず、彼の最も著名な論文の一つ『いかにして観念を

明晰にするか』“*How to Make Our Ideas Clear*” (V. 388~410)²⁾の中で『意味の格率』として述べられた“*the pragmatic maxim*”の検討から始めよう。

パースは1877年から78年にかけて、*Popular Science Monthly*に『科学の論理学の解明』“*Illustration of the Logic of Science*”と題して六つの連続論文を掲載した。そのうちの第一論文『信念の固め方』“*The Fixation of Belief*”と第二論文『いかにして概念を明晰にするか』とは、ともに認識の方法——かれはこれを探究 *inquiry* の方法とよぶ——に関するものであるが、前者では探究の一般的類型が問われ、後者ではこれをさらに具体的に進めて、探究の道具としての〈概念の意味を自由に使いこなせる方法〉(V. 393)が求められる。あらゆる認識がすべて言葉によって表現される概念ないし観念である以上、この概念の検討からまず始めるべきであろうし、この概念明確化の方法こそ論理学の第一課 (V. 393)でもあるのである。

一般的に言って、科学的認識の方法が確立されても、それによって具体的な個別問題が直ちに解決されるというわけではない。実のところ、どのように探究を進めればよいかという方向づけがなされなければ、個別問題の探究は少しも進まないであろう。このような指針を示すものが価値判断であることは、容易に察せられるところである。したがって、一般的な方法を論じる段階では、事実に関して純粹に認識のみを論じうるとしても、具体的な個別問題を扱う場合には、その事実をいかに配列してみるかというような、価値的な問題に関わらざるをえなくなるのである。このことを論理的に表現すれば、一般的・法則的立言では、そこに用いられる概念がどの点でこの世界と接するのかという考察は必ずしも必要とされないが、特称的・個別的立言、つまりある特定の立言では、その概念がどのような脈絡において、言いかえれば意味の場において用いられているかを決定することが不可欠的に重要なのである。

さて、概念や思想を明晰ならしめるために講じられた方法としては、第一段階でのものは、デカルトの〈概念へのなじみ深さにもとづく主観的な明晰さ〉と、より高次の第二段階のものでは、ライプニッツの〈定義にもとづく抽象的な判明さ〉とがあげられる。しかしこれらはともに、解釈ないし了解の域を出

ておらず、探究の目的を達するに足るほどに十分なものとはいえない。そこで、くいまや、さらに完全な第三段階の明晰さが定式化されなければならないときだ>とパーズは考える (V. 390)。かくして提示された『格率』は次のようなものである。

く実際上の諸帰結を持つと想像されるどのような効果を、われわれの概念の対象が持つと考えるのか、を考察してみるがよい。そうすれば、それらの効果についてわれわれの考えることが、その対象に関するわれわれの概念のすべてである。>(V. 402)⁴⁾

概念の意味の明確化を目的とする論考において、このように難解なかたちで定式化されたマキシムが提唱されるとは皮肉なことであろう。しかし、1905年にも彼は“*the pragmatic maxim*”としてほぼ同じ意味のことを次のように表現しているが、これは上記の『格率』を補うとともに、理解を助けてくれるものである。

く知的概念の意味を確かめるためには、その概念の真理から必然的に、どのような実際上の諸帰結が生じうるかを考察してみるがよい。そうすれば、それら諸帰結の全体がその概念の意味のすべてとなるであろう。> (V. 9)

このマキシムにおいて、パーズが求めているものは概念の意味一般ではなく、概念から派生する思考活動についての意味であることに注意しよう⁴⁾。く行動への指針を含まなければ思考とはよべないから、思考の意味をはっきりさせるためには、その思考がどんな(行動の)習慣を生みだすかということを決めさえすればよいのだ> (V. 400)と彼は言う。このように、実践ないし行動を強調し、これとの関連において意味を捉えていくところにパーズの意味哲学の本質がある。ジェイムズ W. James (1842—1910) の表現によれば、く概念の『意味』全体は好ましい行動としてか、または期待どおりの経験としてか、いずれにしても実際上の諸帰結の中に示されるという学説>がプラグマティズムなのである (V. 2)。

そしてまたこのことは、後にデューイ J. Dewey (1859—1952) がく意味とは決して心理的な存在ではなく、基本的には行動の性質であり、副次的には対象の性質である>⁵⁾と述べていることや、さらには今日の米国における論理哲学

者として名高いクワイン W. V. O. Quine (1908—) が「人々があらわな行動へのディスポジション disposition」として含んでいるものを越えて、意味とか、同一性とか、意味の差異とかは存在しない⁶⁾と主張しているところと照合してみれば、プラグマティズムにおける意味論の伝統が、意味への行動的アプローチにあることを容易に察することができるのである。

意味はそのままの形で了解され、解釈されるべきものというよりは、手を加えて分析されるべきものである。なぜなら、意味とは行動においてあらわになるべきディスポジションであるから、分析によって、これが行動にもたらされる形において、明らかにされるべきものである。しかも意味は可能な行動として分析されなければならないから、未来に関わる行動である。もちろん、ここで言われている行動はなにも身体的行動に限られるのではない。思考実験をも含めた広義のものを指しているのである。いかなる行動へも導くことのない概念や思想は、それゆえ試すことのできないものとして、無意味だということになる。行動として分析不能であるがゆえに、ある種の概念は無意味だと言ってもよい。したがって、「有意味」だと言うことは「分析可能」だということになるであろう。

このようにして、概念の意味を分析するということは意味を操作可能なものとするのであって、たんに主観的な明晰判明にとどまっているところの、意味の了解的段階を越えようとするものである。ところで、どんな概念であれ、言葉であれ、それが使われる場合には、必ず状況の設定がなされたうえで用いられる。つまり、述語づけがなされ、そのものについて語られるのである。また、名辞は一つの「もの」にすぎず、そのみでは真・偽判定の対象とならない。そのような名辞に述語づけがなされて、文または命題という形においてはじめて意味の担い手となるのである。

〔註〕

- 1) プラグマティズム及びパース哲学の概略については拙著『プラグマティズム』を参照のこと。
(『哲学講義』所収、1973年法律文化社発行)以下の論述はそれをさらに詳細に展開しようとするものである。
- 2) この表記法は『パース論文集』*Collected Papers of Charles Sanders Peirce*, Harvard Uni-

versity Press (1931—58) の巻数とパラグラフ数を示す。この場合は第V巻 388 節から410節までを示している。

3) 参考までに原文を掲げておく。

“Consider what effects, that might conceivably have practical bearings, we conceive the object of our conception to have. Then, our conception of these effects is the whole of our conception of the object.”

4) パースのこの思想は、現代の言語学的意味論の流れを考える場合にも重要である。たとえばオグデン C. K. Ogden 及びリチャーズ I. A. Richards の『意味の意味』“*The Meaning of Meaning*” (1923) におけるかの有名な三角形が示しているところは、言語記号と、それによって表わされた外界の事物とは、直接に結びついているのではなく、人間の思考活動によってその結びつきが可能になるということなのである。

5) J. Dewey, *Experience and Nature* (1925) Dover, p. 179.

6) W. V. O. Quine, *Ontological Relativity* (1969) Columbia U. P. p. 29.

なお、ディスポジションについては、「性能」、「素質」、「潜在性」などの訳語はあるが、一定していないので、そのまま用いることにする。

3. 意味の分析

さて、パースが提示した『意味の格率』に対して、論理分析的検討を加えてみよう。この格率は「……してみるがよい。そうすれば……」という if-then 形式の条件文になっていることはすぐにわかる。一般に格率とは、条件文の形式を持つところの、実践上の主観的規則のことをいうのであり、記述的な前件と、命令的ないし規制的な後件とから成るものである。また、今の場合、概念の対象の意味を発見することが目的であるから、上記の格率の前後関係はむしろ逆になっているといえるであろう。それゆえ、この格率を、たとえば次のように言いなおすことができる。〈対象に関するわれわれの概念の意味を明確にしようとするならば、その対象から、どのような実際上の（経験的）効果を有する帰結が導きだされてくるかを想像してみるがよい。〉

パースのプラグマティズムの目的は名辞の意味を明らかにすることにあると言うハーバード大学のホワイト M. White (1917—) によると、たとえば『硬い』“*hard*” と言う名辞の意味を明らかにするためには、『これは硬い』という文（定言的単称立言）を『もしだれかがこのものを引っかこうとしても、疵がつかないだろう』“*If one were to try to scratch this, one would not succeed*”

とというような条件文（仮言的立言）に言い換えなければならないとする。ここに翻訳された文は、『もし操作Oがこのものに関して行なわれるならば、Eが経験されるであろう』という構造になっているのである¹⁾。

そこでホワイトは、パースの意味理論が、①プラダマティックな意味を発見するために、単称立言を条件文形式に翻訳するという主張＝仮言命題主義 (hypotheticalism)、②この条件文の前件 (“if”-clause) は人間の操作、つまり実験者の行為を指すという主張＝操作主義 (operationalism)、及び③後件 (“then”-clause) はテスト条件が実施された後に、実験者によって経験または観察されるものを指すという主張＝経験主義 (experientialism) という三つの基本的要素から構成されていると分析する。そして、a)このような翻訳の要求に応じることのできないような一般名辞は無意味とみなされねばならないこと。b) 翻訳ないし定義が同じである二つの一般名辞は、プラグマティックに見れば同義であること。これら二つはパースの意味理論からの帰結であって、伝統的な形而上学及び神学に言質を与えないという態度をとるから、これを『意味論的不可知論』“*semantical agnosticism*” とよびたいとホワイトは述べている²⁾。

この格率には確かに仮言命題主義、操作主義及び経験主義という三つの立場が含まれているので、このうちのいずれか一つだけを強調することは、慎重な仕方とはいえないであろう。また、ことに経験主義的立場からすれば、経験を越える形而上学的概念の有意味性を拒否することも当然であろう。しかしながら、パースが意図したことは、ホワイトの言う言葉（名辞）の意味の明確化というよりむしろ、言葉によって示される事態を分析しようとしたのではないかと思われるのである。ある事態と他の事態との関係を究めることが問題なのである。いまの例で言えば、<引っかこうとしても疵がつかない>とか、<押そうとしてもへこまない>というように、ある行為とその帰結との因果関係を明らかにすること、それが意味を求めることなのである。それゆえ、ここで求められている意味は決して内在化された了解などではなく、外在化され、対象化された因果関係なのである。

これをさらに進めて言えば、意味とは「もの」とそれが指し示す他の「もの」

との関係である。あるものの他のものとの関係において明らかにされた情報が意味であるとも言えよう。そうしてみると、前提から結論へと進ませるもの、つまり純粋な論理的含意としての意味が成り立つと考えられるのである。パーズは言う。〈探究の目的は既知から未知への発見である。したがって、真なる結論を真なる前提から導きだせるような推理であれば正しいのである。〉(V. 365) また、彼の言う「帰結」とは〈後件とよばれるものが出てくるということではなくて、後件は前件から出てくるという事実を意味している〉(IV. 350 n 1) のである。それゆえ、そうした論理的推理の中に意味が求められうるということなのである。

〔註〕

- 1) M. White, *The Age of Analysis* (1955) Mentor, p. 141.
- 2) *ibid.*, p. 142.

4. 検証とディスポジション

この格率が示す論理形式が仮言命題となっていることの意味をさらに追究してみよう。概念や思想の意味を明らかにするために、概念を表現する言葉(名辞)を命題に移し変えるということは、名辞では為しえない真・偽の判断を為さしめるということのほか、「もの」としての言葉を可能的事実のレベルに置き換えるということなのである。たとえば、先きにあげた「硬い」という名辞でも、これをたんに言葉のレベルで考えれば、これは一つの「もの」であって、このものに対する直接的なイメージが得られるにすぎないのである。しかしこれを文(仮言命題)に置き換え、行為(操作)を加えるようにすることによって可能的な帰結が導びきだせる。その帰結がどんな経験的(感覚的)効果を持つかを吟味することが、その言葉の意味を把握することになるのである。

帰結がどんな経験的効果を持つかを見るということは、検証または反証の可能性とその手続きとを問うということであるから、検証可能性 *verifiability* または反証可能性 *falsifiability* の成立如何が意味の有無を決定することになる。それゆえ、ある文の〈意味を知る〉ということは、その文が〈原理的に検証または反証される仕方を知る〉ということと等値となるのである。

ところで、検証可能性の原理が有意味性を決定する基準であるとして、論理実証主義者に活用されたことは周知の事実である。しかし、この原理をきびしく適用すれば、全称命題の形をとる科学法則のみならず、かれらの主張する哲学的言明そのものが検証不可能となり、無意味 *meaningless* となってしまう。彼らの意図に反するという結果に立ち至るのである。そこで、このような事態を克服しようとする過程を通して、よりゆるやかな基準として、たんに文を支持する経験的手段の有無にとどめる確認可能性 *confirmability* の原理へと移行したことは当然の成り行きと言えるであろう。

論理実証主義においては、まず有意味な命題とは真・偽を判定しうる命題と決め、この有意味な命題を、アприオリに真・偽を決定できる分析的命題（トートロジー）と、経験的テストによって真・偽が決められる総合的命題とははっきり二分する方法をとる。そして、アприオリにも、経験的テストによっても真・偽を判定できない（検証できない）形而上学的命題は、すべて無意味であるから排除されねばならないと宣言したのである。

しかしながら、ここにいくつかの問題が残されている。文の一形態であり、真理値を有する命題のみを取りあげる仕方では、真・偽判定が困難であっても、有意味な文が存在するという事実を考慮しない誤りにおちいるのではないかということ。また、命題を分析的（必然的）と総合的（蓋然的）とはっきり二分することが果して妥当かどうかということ。さらに言えば、シュリックのように、文の意味とはその検証の方法であるとして、意味と検証法とを同一視しかねないのであるが、道徳的判断や美的評価などにおいては、この考え方が当てはまらない事例がたくさん存在するのではないかということである。

これらの問題については、既に論理実証主義の内部においても答えが出されているが、ここではこのような問題点について、パースならどう答えるであろうかということを考えてみたい。まず言えることは、パースは『意味の格率』を必ずしも検証原理としての役割を果すものとは考えていなかったということである。彼が提唱したのは意味の格率であって、意味の基準ではなかった。意味を求めるための実践上の規則であったのだし、その意味とは可能的帰結とし

ての経験的効果であった。このように、意味を実践との関わりにおいて捉えていくのである。言い換えれば、意味を行動へのディスポジションとして捉える行動主義的意味論なのである。

それでは、行動主義的なパースの意味論はいったいどんな構造をもち、どんな意義があるのだろうか。パースは〈ある事柄が何を意味しているか〉ということは、その事柄がどんな習慣をもたらすかということにほかならない。……習慣が何であるかということは、それがどんな時に、どんな仕方でわれわれを行動させるか、ということを見ればわかる〉(V.400)と言い、また、〈信念とはわれわれを、機会が生じれば特定の仕方で行動させる状態におくものである〉(V.373)と言って、信念や習慣——「行動」に対しては同義に用いられる——を行動へと導びくもの、ディスポジショナルなものとして考えている。

それゆえ、たとえば〈彼は信念を持っている〉と言うことは、〈彼は時に臨んではっきりと行動するディスポジションを持っている〉ということになるのである。パースはこの信念 = 習慣を期待 expectation の習慣とも考えているから、〈彼は信念を持っている〉は〈彼は時に臨んでそれを期待するディスポジションを持っている〉と言うこととも等しいのである。言い換えれば、期待された経験が得られなければ、彼は驚くというディスポジションを持つわけである。

そうしてみると、〈彼は……と信じる〉という形式の立言は、〈彼は……の動機に動かされて……を経験するはずだとすれば、彼は……を行動し、かつ……を期待するだろう〉という形式の立言によって解明されることになる¹⁾。それゆえ、信念とは行動と期待とによって構成された習慣であると言えるであろう。

ところで、〈彼は p なることを信じる〉という形式を持った立言の真理値は p の真理値には依存しない。このような命題は志向関係 intentional relation を記述する命題であって、真理関数的命題ではないのである。この p が命題であれば、人と命題との関係(志向関係)はその命題の真・偽を論理的に含意しない。つまり、だれかがある命題を信じるという事実は、信じられている命題

の真理や虚偽を含意しないのである。また、この p が命題以外の対象であるとするれば、その対象が物理的世界に存在することを論理的に含意しないのである。それゆえ、志向関係を記述する命題は、変更が加えられなければ、真理関数的論理学の中に組み入れられることはできないのである。

かくして、パースにおける意味とは信念 = 習慣であり、ディスポジショナルな特性を持つ行動と期待とにおいて明示されるのである。このような構造を持つとすれば、信念 = 習慣をあらわす命題は志向関係を示すものとして表現することができる。この志向的命題は、そのままでは真理関数的命題として扱うことのできないものであるから、意味を求める思考活動においては、真偽は必ずしも問われていないと見ることができるであろう。このことは、『意味の格率』が行動的意味を求めるための主観的原理として提示されたのであって、真理性の基準としてではなかったことを思い合わせれば、当然のことと言えるであろう。しかるにジェイムズは、『意味の格率』を広範に適用して、観念が行動によってテストされ、満足な結果が得られればそれが真理だとしたのである。このように〈真理の基準〉として用いたことが、この格率の生みの親であるパースの不興を招いた事情はよく知られていることであろう (V.414)。

〔註〕

- 1) V. Tomas(ed.) *C. S. Peirce's Essays in the Philosophy of Science* (1957) The Liberal Arts Press, p. ix.

5. アブダクションの論理と意味

パースはすべての概念を、つまり言語記号を行動のための道具として捉えていた。このことは、概念の知的な意味は仮説として表現できると言い換えてもよいであろう。『意味の格率』も仮説的推論の一形態と見ることができる。彼は仮説的推論をアブダクション *abduction* とよんでいるが¹⁾、プラグマティズムは結局このアブダクション (仮説形成) の論理にほかならないことが強調されている。1903年ハーバード大学で七回にわたって行なわれたプラグマティズムに関する連続講演の最終回で彼は次のように言う。

くプラグマティズムの問題を注意深く考察しますと、それはアブダクションの問題にほかならないことがわかります。すなわち、プラグマティズムは意味の格率を提起しますが、この格率は、筋が通るものならば、仮説としての地位を占めるのに、仮説の適格性に関するなにかの規則など不必要としなければならないというものです。仮説とは現象を説明する有望な示唆です。そして、さらに申しますと、これこそプラグマティズムの格率が、少なくとも論理学に関する限り、為そうとするすべてなのでして、この格率はもちろん心理学的な命題ではありません。なぜならば、概念というのは、他の概念や志向との関連を考慮に入れると、われわれの実際的行為を、第二の概念とは異なる仕方に変えてしまうと考えられうる場合を除いて、第二の概念と異なる論理的効果や意義を持ちえない、というのがプラグマティズムの格率だからであります。さて、われわれの実際的行為をいかに矛盾なく形成すべきかということに関する探究を、なんらかの形式主義的根拠にもとづいて、禁ずべきだというようなアブダクションの規則など、いかなる哲学者によっても認められないだろうことは明白です。それゆえ、格率というのは、可能的に実際的な考察にのみ注目するのでして、なんらかの仮説を不適格として除外するための補助定理など必要としないのです。すべての哲学者は、格率が認めるいかなる仮説でも認められるべきだということに同意するであります。一方、そのような考察以外のなものも論理的効果や意義を持たないということが正しいとすると、プラグマティズムの格率は、認められるべき仮説がどんな種類のものであっても、切り棄てないということは明らかです。このようにして、プラグマティズムの格率は、真であるとするならば、アブダクションの論理全体をすっぽりとおおってしまうのです。>(V. 196)

では、パースの格率がアブダクションであるとすれば、良いアブダクションとはどんなものであるのか。彼はそれを、事実を説明する説明的仮説であるとする。そして、<説明的仮説の目的は、実験的テストにかけることによって、すべての驚きの回避と、背かれることのない積極的な期待の習慣の確立へと導くことである>(V. 197) と言う。そこで彼は自説と異なる見解のいくつかを批判するが、なかなか興味深いものがある。たとえば、直接知覚しえない仮説などは認めるべきでないとする見解²⁾、仮説から導きだされる経験的予測を真とは認めないという見解、さらには帰納はポジティブな実験的証拠のあるものに限られるべきだとする見解をあげて批判している (V. 198~200)。

さて、それではここでパースの線に沿ってさらに考えてみよう。アブダクションは説明的仮説を見いだすことにある (V. 171) とすれば、説明的仮説とはど

のようなものなのか。

＜説明的仮説とは心が多様な事実を一つにすることができるようにその目的を制限するのではなく、これらの事実をわれわれの一般的な宇宙観と結びつけようとする概念のことであって、ある意味で検証可能なものでなければならない。言い換えれば、未来の経験に関する無数の可能な予測から成る靱帯のようなものでなければならない。それゆえ、予測がはずれば、靱帯がくずれるのである。＞(V.597)³⁾

そうすると、予測が当ることによって、その仮説は真とされる、という推論形式をとるのであるが、論理的に言えば、予測は仮説から導びきだされてくるものであるから、《予測(P)が真なら仮説(H)は真》と結論づけることは後件肯定の虚偽をおかすことになる。つまり、式で示せば

$$[(H \rightarrow P) \wedge P] \rightarrow H$$

である。また、この場合偽とされる予測が導き出される(予測がはずれる)ならば、仮説が偽となることは演繹推論として当然妥当なことである。

$$[(H \rightarrow P) \wedge \neg P] \rightarrow \neg H$$

しかしながら、＜論理的規則によって妨げられることの極めて少ないアブダクション＞(V.188)においては、このような否認例があっても、直ちに《予測が偽だから仮説は偽》と結論づけることに対しては、慎重な態度がとられるのではなかろうか。事実、科学史を繙けば、そのような実例をいくつも見つけたことができるであろう。

予測が偽とされること、つまり反証の実例が一つでも示されることは、多くの確認例が得られること、つまり検証されることよりも、むしろ決定的であり強力である。前者は妥当な演繹推論にもとづいているが、後者は帰納推論であって、同じ帰結をもたらす他の対立仮説の存在が可能だからである。それゆえ、パースがここで＜ある意味で検証可能なもの＞として反証可能性の理論を示唆していることは興味深いことである。しかしながら、否認され、消去されるのは可能な予測の一つであって、すべての予測、すべての仮説を消去することは論理的に可能であっても、可能な予測の数は決して有限ではないし、すべてを考えだせるかどうか確かではないのである。

仮説が「すべてのAはBである」という形式をとる単純な全称的立言で示さ

れるものであるならば、一つの否定的事実、つまり「BでないところのA」を示すことによって、きっぱり拒否されるのである。しかし、科学理論は普通、この形式よりも複雑であるから、実際には理論のうちのほんの一部が拒否されるにすぎない。このように、反証といえどもそれほど大きな力を持っているわけではないのである。

検証や反証を行なうのは、しかしながら、アブダクションではない。パースによれば、それらはインダクション（帰納）の段階においてなされるのである。アブダクションは推論として〈完全に明確な論理形式〉(V. 188)⁴⁾を有しているが、ディダクション（演繹）及びインダクションという他の二つの推論に比べて弱い推論であって、〈証拠を提供する力を持たない〉(VIII. 209)のである。また、〈アブダクションは等しく事実を説明するであろう他の仮説よりも、ある一つの仮説に対する好み preference を含んでいるので、その限り、この好みは仮説の真理に関する既成の知識にもとづかないし、また、仮に認めた後になされる仮説のテストにももとづかないのである。〉(VI. 525)

その論理式に示されるように、アブダクションそのものはどこまでも正当な reasonable 結論を導びきだす推論である。奇異なる現象の根拠を問う推論である。さらに言えば、格率が示すように、可能な実際的帰結を想像（予測）する推論である。仮説として示せる概念が実際的帰結を伴うようなものであれば有意義なのだから、そのように推論することが意味を求めることにほかならないのである。それゆえ、アブダクションにおいて問われるものが意味であり、ディダクション及びインダクションにおいて問われるものが真偽であると言えるのではなからうか。

われわれの探究活動はこれら三つの推論の積み重ねの過程である。探究は予期されざる事実の出現に対するアブダクションをもって始まり、提起された仮説が真であるとすれば、どんな帰結が導きだされるかの分析がなされ（ディダクション）、導きだされた帰結が果して正しいものかどうかのテストがなされる（インダクション）。この過程からすれば、真・偽が決定できるから有意義だということではなく、有意義だから真・偽が言える、ということではなからうか。

ないであろう。

〔註〕

- 1) 拙著『パースにおける論理的なもの』——パース研究(1)——(城西経済学会誌第5巻第1号所収) 参照。
- 2) パースはおよそ次のように述べている。<コント A. Comte (1798—1857) らの、真偽が直接知覚しえない仮説などというものは認められるべきでないとか、予測すること、つまりなにかを期待することは非科学的である、というような考え方は、そうした意見そのものが知覚の領域を越えているから、自己矛盾をおかしているのである。>
- 3) ここでもパースはコントらの、検証可能でない理論を不適とする考え方は、真理の悪しき解釈であると批判している。(V. 597)
- 4) アブダクションの定式化は次の通りである。
 予期されざる事実Cが観察される、
 もしAが真ならば、Cは当然のこととなるであろう、
 それゆえ、Aが真だと想像することには根拠がある。(V. 189)

6. むすび——選択的非決定論としての意味理論——

以上の考察は、仮説というものが、元来真偽未定の命題であるから、<真なる仮説>とは言われず、<良き仮説>と言われていることから推測できる。真・偽が問われる、つまり検証されうる仮説よりも、<意味ある仮説>が求められるのである。良き仮説とは<自然なものであり、人間の心によって躊躇なく抱かれるもの>(V. 592) である。つまり、人間の心にはそのような天与の能力が授けられているのである。パースは言う。<人間の心はある種の正しい理論を想像する自然的適応能力を有しているということ、あなた方が認めるに至るに違いないことを私は固く信じている>(V. 591)。このように精神のはたらきの中に一種の生得的傾向を認めることは合理主義的な主張につながると言えよう¹⁾。しかしパースの場合、人間の心はどこまでも観察事実という経験によって触発され、しかもポジティブにはたらくという、カント的な意味におけるディスポジショナルな本性を持つものなのである。

しかしながら、このような能力を持つ人間の心はまた、ともすれば誤りにおち入りがちなる傾向をも持っている。<すべての信念の中で、人間が誤るものだという信念ほど自然なものはない>(V. 592) のである。とすれば、この両者の関係を究めることこそ論理学者の為すべき仕事であろう。このようにして、ア

アブダクションの論理はまた、くわれわれの認識についてのあらゆる主張は決して誤りをまぬがれることができず、経験の流れの中で絶えず批判され修正されるべきものだ> (I.14) とするファリビリズム fallibilism (誤謬主義) の思想と結びつくことがわかる。意味を求める実践上の原則としてのアブダクションと、事実認識の大原則としてのファリビリズムとがしっかり結びついて、認識活動のあるべき姿を示しているところに パース哲学の本質が見られるのである。

このファリビリズムの主張は、事実問題に関する決定は決して為しえないという非決定論的立場に立つものである。私は先きの論文で、パースが『チャンス』概念にもとづく非決定論的思想によって、演繹主義と物理主義とに立つ古典的決定論を論破していることを明らかにした²⁾。われわれの精神が物理的な因果必然性によって支配されているのではなく、自由に振舞える自発的存在だということの根拠は、しかしながら、どこに求められるべきであろうか。この根拠を合理主義に求め、アプリオリな原理にもとづいて解決されるとすることは一つの行き方である。しかしパースはこの途をとっていない。どこまでも経験の事実の上に立って、多様な仮説を創出するわれわれの精神のはたらきに求めているのである。

奇異なる事実を説明しようとする心の自発的なはたらきは、かなり任意な選択可能性を前提としているのではなからうか。あれを採り、これを採らないというわれわれの好みを、物理的な因果の鎖によって、決定論的に説明することは可能であるかもしれない。しかしそれなら、なぜわれわれの心が多様な仮説を発想し、しかもそれらの多くが経験的事実とうまく合致するのであろうか。物理的因果関係による説明法では、この『なぜ』という問いには答えることができない。『なぜ』という問いは理由を求める問いであって、原因を求める問いとは異なる。原因は物理的に説明できるが、人間精神の志向的・意図的行為を理解するためには、原因ではなく理由が理解されねばならない。アブダクションは理由を求める論理である。しかも、その理由を一つにしぼって決定してしまうことを許さない、いわば寛大な論理である。なぜなら、事実関係につい

での決定は決して為しえないからである。決定しえないということは、選択しうる可能性が存在することであって、そこに人間精神の『自由』の証が^{あかし}含意されていると見てよいであろう。

〔註〕

- 1) 変形生成文法理論の創始者として知られる米国の言語学者チョムスキー N. Chomsky (1928—) は、われわれの言語習得能力が、与えられた音声や表面構造から深層構造を習得する（意味を理解する）能力であって、そこに生得観念を認めるデカルトらの合理主義思想を受け入れざるをえないとするのであるが、パースのアブダクションの理論が、デカルトの二元論を克服する立場から、人間の知性と動物の本能との間の有意義なアナロジーを行なっていることを高く評価している。N. Chomsky, *Language and Mind* (1968) Harcourt, Brace & World, Inc., p. 78 ff.
- 2) 拙著『チャンスと法則』——パース研究(3)——（城西経済学会誌第7巻第1号所収）参照。